伝統文法と生成文法の接点

日本語の動作・状態述語について

久保美織

キーワード：状態述語、動作述語、格、進行形、動名詞

要　旨

本論文は、日本語の動作述語と状態述語の第一義的な違いを、生成文法の枠組みで統語的に明らかにしようという試みである。状態／動作述語の違いはI(nfl)が語彙的に満たされているかどうかという統語構造上の違いとして捉えられるべきであることが主張され、これによって従来指摘されていた2種類の述語の違いが説明可能になることが示される。まず、目的格の違いに関しては、動作動詞が基底の位置でその補部を統率し、対格を与えるのに対し、状態動詞の構造では、Iに上がって主要部としての役割を果たせなくなったVの替わりにIが主格を与えることが論じられる。また、進行形については、広くV1-て　V2構文の統語的性質が調べられ、V1-ては後置詞句を成し、V2の補部に位置することが主張される。状態化形式としての進行形の意味は、Pで囲まれて「ことがら」にされたV1を、それ自身状態述語であるいるが取っていることによる。最後に、「状態」という意味はある一定の統語構造自体からくる意味つまり構造的意味とでも呼ぶようなものであることが論じられる。

1　はじめに

日本語の動詞が、いわゆる状態性という概念を軸にして少なくとも二つに分けられるということは、古くから主張されてきたところである(大槻 1897, 金田一 1950)。いわゆる状態を表すとされる状態動詞とその他の動作動詞を分類区別するための基準は、国語学はもとより生成文法においても盛んに論議されてきた。その基準は、状態性といった意味に範をとるものから、時制の解釈、進行形(～ている)との相互性、そして目的語の格の相違といった形式的なものに至るまで、数々提案されてきたが、これら基準の必然性、また何を根本的な違いとして捉えるべきかということについては必ずしも一致した見解は存在しなかった。

本論文では、この2種類の動詞の区分が文法を構築する上でどのような理論的重要性を持つか、そして従来指摘されてきた2種類の動詞の違いに何らかの説明を与えることができるような第一義的な違いは何かを探求することを目的とする。具体的には、状態／動作

述語の違いは生成文法の枠組みでI(nfl)が語彙的に満たされているかどうかという統語構造上の違いとして捉えられるべきであることを主張する。[注1] このような構造上の違いは、過去提案された基準に理由付けを与えるものであり、いわゆる状態性といわれる意味についても新しい考察を与えるものである。

2 目的語の格と統率[注2]

状態動詞と動作動詞の違いとして、従来指摘されてきたことの一つは(1)に示すような、目的語の格の違いである（久野 1973）。

（1） a． ここに　いすが／＊を　ある。
　　 b． 花子に　お金が／＊を　要る。
　　 c． 太郎が　林檎を／＊が　食べる。

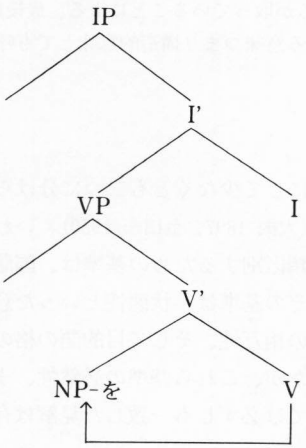
(1 c)のように、動作動詞の目的語は一般に目的格とされている対格をとるのにかかわらず、状態動詞は(1 a, b)のように主格をとることが知られている。

ここで問題にしたいのは、なぜ目的格の違いが2種の動詞を区別する基準となるのか、またどうして一般には主語に与えられるとされている主格が、状態動詞においては目的語に表れることが可能なのかということである。

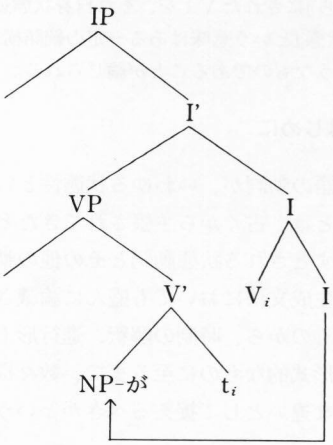
一般に生成文法（特に原理と変数によるアプローチ）では、対格は動詞によって動詞の補部

（2）

a． 動作動詞



b． 状態動詞



に与えられ、また主格はIによって主語に与えられるとされている。(Chomsky 1981)[注3] 従って、ここでは変則的なケースとして、主格が状態動詞の補部に表れるためのメカニズムを解明することが必要である。本論文では、状態動詞が基底のVの位置からIの位置へ移動することにより、一般に主格を与えるとされているIが目的語を統率できるようになるという仮説を立て、以下検証する。この仮説に基づいた動作動詞、状態動詞の構造は前頁(2)の通りである。(2 a)の動作動詞の構造では、基底の位置に止まっているVがその補部を統率し、対格を与える。それに対し、(2 b)の状態動詞の構造では、インコーポレイトされたVはもはや主要部としての役割を果たせなくなり(Williams 1981 による Righthand Head Rule)[注4]、その代わりにIが主要部として、Vが元の位置で統率していた目的語を統率することになり(Baker 1988 による Government Transparency Corollary)[注5]、これにより主格を与えることができる。

このように状態動詞が移動するという分析は、目的語における格の相違を正しく説明することができるが、それ以外に本分析を支持する現象が独立に存在する。動作動詞文においては、(3)のように動詞句を文の先頭に出す移動が可能だが、状態動詞では(4)のように非文を生成してしまう。

(3) a. 髪を切りさえ　太郎がした。
　　b. アイスクリームを盗みさえ　太郎がした。
(4) a. ＊本がありさえ　ここにした。
　　b. ＊宝石が要りさえ　花子にした。

もし状態動詞文と動作動詞文の構造が同じであれば、上の文法性の違いは何かアドホックな制限によって説明されなければならないが、本提案の状態動詞の移動を仮定すれば、一般に非構成要素は移動できないという原理に包括される。つまり、状態動詞がIにインコーポレイトされている為、前置されている部分は一つのまとまりを成さないのである。

以上見てきたように、状態動詞の移動を仮定すれば、なぜ目的格の違いが動作動詞と状態動詞を区別するか、そしてその違いがなぜ生じるかについて、原理的な説明を与えることが可能になるわけだが、ここで一つ考えておきたいことは、なぜ状態動詞が移動しなければならないかということである。これにはいくつかの理論的方法が考えられるが、一つには状態動詞は閉じたクラスの要素として、XPレベルの統語的下位範疇化以外に、Baker (1988)の言うところの形態的下位範疇化をもつと考えることが可能である。基底構造では、統語的下位範疇化を満足するために通常のVの位置に生成されるが、派生の過程で＋__Iという形態的下位範疇化を満足するために移動するということである。

3　状態述語にみられる閉じたクラスの要素としての特異性

前セクションで考察した［NP-にNP-がV］というパターンをとる状態動詞（ある、要る）以外にも、目的語に主格が表れる場合がある。これらのケースは閉じたクラスの特徴と

して、各種の特異性を持つ[注6] (Emonds 1985)。本セクションでは各述語ごとに、その性質を簡単に見ていきたい。

初めに、わかる は(5)のように三種類の格指定があることが知られている。

(5) a. 花子が　英語が　わかる。
　　b. 花子に　英語が　わかる。
　　c. 花子が　英語を　わかる。

セクション2でみた状態動詞と違う点は、(c)のような対格をとる動作動詞としての表れを許すと共に、(a)のような主格が二つ表れるパターンも許すという点である。久保(1992)の可能の語尾（～える）と繋詞の分析に従って、ここでは(a)(b)をわかるのI、つまりモーダルとしての用法として分析したい。つまりわかるは英語のneedにみられるようにVとIという二つの範疇に属する。これに加えてさらに注意しなければならないことは柴谷(1986)でも指摘されているわかるの自動詞としての用法である。以下の文を(5b)と比較されたい。

(6) 花子に　その答が　わかる。

双方、表面的には非常に類似しているが、(6)ではNP-がは自動詞の主語であるのに反して(5b)ではモーダルの目的語である。これに伴う意味の違いも存在し、(5b)が英語のHanako understands English.に対応するのに反して、(6)はThe answer becomes clear to Hanako.[注7]に対応する。従ってわかるの語彙表示は以下のようになる。

(7) わかる　V:＋(NP) _____, I:＋NP_____

次に、できるという語も目的語に主格をとり、(5a, b)に相当する二つのパターンをとることが可能である。

(8) a. 太郎が　そろばんが　できる。
　　b. 太郎に　そろばんが　できる。

わかるとの違いは動作動詞としての用法をもたないことであり、従ってできるは単にモーダルであるといえる。

要るという語はセクション2でも考察したNP-に NP-がというパターンに加えて、NP-が NP-がというパターンも可能なようであるが、その文法性は人によってかなり異なるようである。これは言語のゆらぎと関連づけて考えられる問題であり、二つの主格を許す人の文法では要るはできると同様モーダルであり、許さない人の文法では要るはあると同

様状態動詞としてふるまっていると考えられる。

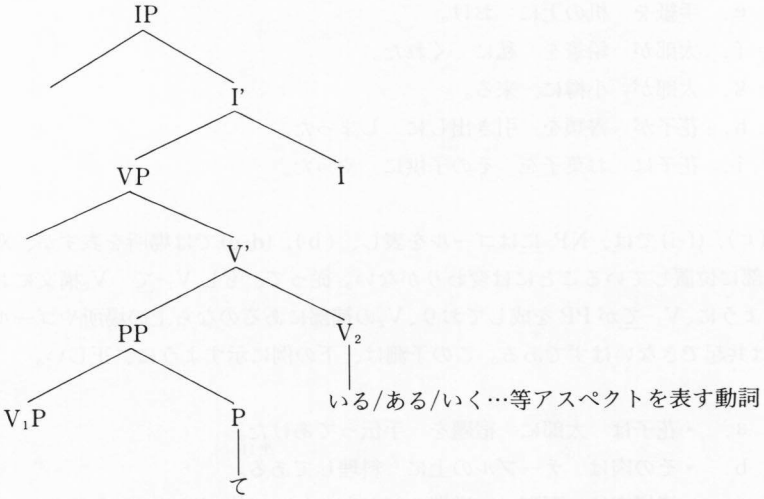
セクション2で考察した状態動詞に加えて、Iに基底生成されるモーダルも過去に指摘されてきた状態性の基準をよく満たす。従って、状態動詞とモーダルをまとめて、状態述語とよぶことにする。

4 進行形（～ている）の構造と状態述語

セクション2で扱った目的格の違いに加えて、状態述語と動作動詞の違いとして～ているという形をとれるかどうかという基準がある。従来よく言われてきたことは、状態述語は既に状態を表しており、いわゆる進行形である～ているとは意味が重なるので一緒に使えないということであった。しかし～ているとの非相互性が、この意味の重複性からは説明できないということは～てという形がいる以外の、いわゆるアスペクトを表す動詞(あげる,ある,いく,いる,おく,くれる,くる,しまう,みる,やる 等)[注8]と一緒に使われる時にも、状態述語に対する同様の制限がみられるということからわかる(久保 1992)。(以下この構文を V_1-て V 2構文と呼ぶ。) また、～ているという形式が必ずしも動作の進行のみばかりでなく、完了の意味も表すことがあるということも知られており、このことからも、意味の重なりからのみでは状態述語と～ているの非両立性は説明困難であることがわかる。[注9] ここでは、まず V 1-て V_2という形式の統語的構造を調べるところから始めてみたい。

一般に、英語の動名詞に翻訳されることから て は動名詞形と呼ばれるが、その性質に

(9) V_1—て V_2構文の構造



ついては McCawley and Momoi (1986)、そして Shibatani (1978) 以外は、あまり系統だった研究はされていない。McCawley and Momoi では、 V-ては動詞の一つの活用形として、これ以上分析できないものとして扱われ、柴谷では複合標識とされた。本論文では、て を後置詞と分析し、いま問題になっている V_1-て V_2の構造を(9)の通り提案したい。

ここで後置詞てはV$_1$を主要部とする動詞句を補部として取り、さらに、いる／ある／いく等 動詞V$_2$はてを主要部とするこの後置詞句全体を補部として下位範疇化している。以下、この分析の妥当性を探りたい。

まず、考えてみたいのは、V$_2$を構成する動詞というのは、どのような動詞なのかということである。従来アスペクトを表す動詞というように言われてきたが、一部の動詞が V_1-て V_2構文で使われたときにアスペクト的な意味が生ずるのみで、通常 V_2の動詞のみでは、アスペクト的な意味はない。それでは、これらの動詞に共通なものというのは何なのであろうか。下の例に示すように、これらの動詞は全て NP-にという後置詞を下位範疇化していると考えられる。[注10]

(10) a. 花子が　タイ焼きを　友達に　あげた。
　　b. その本は　彼女の研究室に　ある。
　　c. 太郎は　ニセコに　行った。
　　d. 私の娘は　函館に　いる。
　　e. 手紙を　机の上に　おけ。
　　f. 太郎が　鉛筆を　私に　くれた。
　　g. 太郎が　小樽に　来る。
　　h. 花子が　書類を　引き出しに　しまった。
　　i. 花子は　お菓子を　その子供に　やった。

(a), (c), (f-i)では、NP-にはゴールを表し、(b), (d-e)では場所を表すが、双方、動詞の補部に位置していることには変わりがない。従って、もし V_1-て　V_2構文において、提案のように、V_1-てが PP を成しており、V_2の補部にあるのなら上の場所やゴールを表す PP とは共起できないはずである。この予測は、下の例に示すように、正しい。

(11) a. ＊花子は　太郎に　宿題を　手伝ってあげた。
　　b. ＊その肉は　テーブルの上に　料理してある。[注11]
　　c. ＊清掃車は　下町に　道端のゴミをきれいに片づけていった。
　　d. ＊太郎は　東京に　挑戦者を　やぶっていた。
　　e. ＊その事は　部長室に　私から　部長に　話しておく。
　　f. ＊太郎は　私に　仕事を　替わってくれた。
　　g. ＊太郎は　小樽に　そのコースを　観察してきた。

h. ＊花子は　引き出しに　誤って　花瓶を　割ってしまった。

i. ＊花子は　その子供に　釣った魚を　助けてやった。

(10)でV_2と一緒に現れていたにでマークされたPPとV_1-ては両立できていない。この事実は、提案のようにV_1-てがPPでなおかつV_2に下位範疇化されていると考えれば、一つしかないV_2の補部の位置を場所やゴールをあらわすPPとV_1-てが争っているとして説明できる。

また、次の例のようにV-てが通常の後置詞句と並立に接続されていると分析できるような文が存在する。

(12)　太郎は　裸足で　そして　だまって　砂浜を歩いた。

裸足では単純に[$_{PP}$[$_{NP}$ 裸足] [$_{P}$ で]]、つまり後置詞句として分析される。接続される要素は同じ範疇のものに限られるから、裸足でと並立接続されているだまっては後置詞句、つまり後置詞であるてがVPを補部としてとっていると分析できる。この文で、だまっては裸足でと並立に動詞を修飾しており、V_1-てV_2構文中のV_1-てのように補部ではなく付加詞である。しかし、ここで重要なのはV-てのPPと接続されることができると言うことで、補部として使われているV-てと付加詞としてのV-てとが、異なるカテゴリーに属していなければならないとする理由はない。

さらにては、久保(1993)で指摘されたように、前に連っている動詞のアクセントを全く変化させない。久保(1993)によれば、このように連結している語のアクセントを変化させない語尾の統語範疇は機能範疇に限られるゆえ、上の て が後置詞であるという分析と矛盾しない。

従って、以下、V_1-てV_2構文を後置詞分詞構文と呼ぶ。この後置詞分詞構文において後置詞てのの役割は英語のatと類似的に考えられる。つまり後置詞分詞構文とはV_1Pで表されている動作を後置詞てで囲むことによって「動作」を「ことがら」に変え、その「ことがら」がV_2だという形式である。V_2が、逐語的な意味をもたないことに関しては、さらに詳しい探求が必要であるが、V_2の補部に位置するPPが本来のPPの素性(場所、ゴール等)をもたないときに二次的な意味が現れるといえる。

ここで、本論文で特に注目している進行形に立ちかえって考えてみると、吉田(1993)の言う「「ている」といった要素は、元来、述語動詞によって指し示される内容が“ことがらとして存在するということ”を表すべき要素であったのではないかと考えることができる。」という捉え方と通ずるものがある。後置詞てがV_1Pを「ことがら」に変えそのことがらが「いる」、つまり「存在している」のである。動作動詞を状態(つまり進行形)にかえるという～ているの機能は後置詞てにあるのではなく、後置詞句をとっているいるそれ自身が状態動詞であり、Iへの移動を経なければならないということによる。

それではなぜ状態述語は後置詞分詞構文と相容れないのであろうか。本論文で提案した

状態動詞のIへの移動、そして状態述語のモーダルとしての分析によれば、この非相互性は説明可能になる。つまり(9)の構造において、もし状態動詞がてを主要部とする後置詞句内にあるとすると、PそしてVという主要部に阻まれて(Travis 1984による Head Movement Constraint)[注12]、+___Iという形態的下位範疇化を満足させることができない。またモーダルについては後置詞てはVPをとっている為、元々表れる余地がない。したがって、このような統語的な理由により、状態述語は後置詞分詞構文をとれないわけである。

5 構造的意味について

本論文では、Iに上がる状態動詞とIに基底生成されるモーダルとが一般に状態述語と呼ばれるものを構成するということを論じてきた。動作動詞がVの位置に止まるのに反して、この状態述語に共通なことは語彙的な要素がIの位置を占めているということである。この統語的な違いは、何らかの意味で「状態性」という概念に関連していることは明らかであるが、では一体「状態」という動詞の意味がこのような統語的特徴の原因なのであろうか。それとも「状態」という意味はある統語構造から生じるものなのであろうか。

英語の状態動詞と日本語の状態述語を比較してみることにより、理論上意味のある分割ラインは統語的なものであることを示すことができるように思う。まず、英語に比べて日本語の状態述語の数が格段に少ないことはすぐに気がつくことであるが、下記に示すように、英語の状態動詞で日本語の状態述語に対応しないものは全て、〜ているの進行形か形容詞で翻訳される。

(11)

英語の状態動詞	—	対応する日本語	英語	—	日本語
know	—	知っている	fear	—	こわい
believe	—	信じている	want	—	ほしい
own/possess	—	もっている/所有している	like	—	すきだ
lack	—	欠けている	dislike	—	きらいだ
prefer	—	好んでいる			
hate	—	憎んでいる			
owe	—	負っている			

本論文でみたように、進行形ではいるが状態動詞ゆえにIに移動しており、また久保(1992)で論じたように形容詞はIに基底生成される繋詞をとる。よって英語の状態動詞は全て、日本語ではIが語彙項目で占められた構文に翻訳されるわけである。もし単語の意味だけを考察するなら、上のbelieveに対する日本語の動詞信じるは状態を意味するというようにも考えられるわけだが、統語的にはこの動詞自身は完全に動作動詞として振る舞う(目的語に対格をとり進行形が可 等)。従って「状態」という意味はある一定の統語構造の効果であり原因でないということが結論できる。この構造自体からくる意味を構造的意味と呼び、ここではその一つの例として次のような一般化を提案する。

(12) 状態としての解釈：Iが語彙項目で占められている日本語のS構造の構造的意味は「状態」を表す。

つまり、状態性は各単語の意味からくるのではなく、ある一定の統語構造自体から生まれるのである。

本論文では状態性という概念を中心に、日本語の述語の性質を考察してきた。状態述語と動作動詞を区別する第一義的な違いは語彙項目がIを占めるかどうかという構造的な違いであり、これによって今まではリストにすぎなかった両述語の違いに原理的な説明を与えることが可能となった。

注1 「語彙的に満たされている」または「語彙項目によって占められている」といった表現は、意味的にも統語的にも充分規定された語彙項目が挿入されていることを意味する。このような閉じたまたは機能的な語彙は、PF(音声部門)になって始めてある一定の形態素の形をとる統語的なフィーチャーと区別されるべきものである。(詳しくは Emonds 1985 参照)

注2 統率については数多くの研究があるが、ここでは大雑把に次のように考えておく。

A governs B iff A c-commands B and there is no maximal projection containing B but not A.

注3 国語学における格助詞という範疇はかなり広いものであるが、生成文法ではそれらを統語上の違いに基づき、主に格 (case) と後置詞 (postposition) に分けて区別している。主格のが、対格のをは格であるが、与格(Takezawa 1987 参照)、から、まで、で、などは後置詞である。例えば、数量詞遊離の現象に関して両者の違いがみられる。数量詞は、(i)のように格を挟んで遊離できるが、(ii) に示したように後置詞を挟んでは、遊離できない。

(i) a. 三人の学生が、研究室に、やって来た。
　　b. 学生が三人、研究室に、やって来た。

(ii) a. 学生が、三つの村からやって来た。
　　b. *学生が、村から三つ、やって来た。

また、格は、さえ、もなどの取り立ての助詞と共存できないが、後置詞では、共存が可能である。

(iii) a. 花子が、宿題をやってきた。
　　b. *花子がさえ、宿題をやってきた。

(iv) a. 花子が、太郎に　宿題を教えてあげた。
　　b. 花子が、太郎にも　宿題を教えてあげた。

注4 'In morphology, we define the head of a morphologically complex word to be the righthand member of that word.'(Williams 1981, 248)

注5 Government Transparency Corollary (Baker 1988, 64)

A lexical category which has an item incorporated into it governs everything which the incorporated item governed in its original structural position.

ここで Baker は GTC を語彙項目に限っているが、日本語では I もこれに加える。

注6 閉じたクラス (closed class) とは、開いたクラス (open class) と対比される概念で、西洋伝統文法でよく知られている。原理と変数によるアプローチでは機能範疇とほとんど同等に考えられる。

注7　NP-がのステイタスの違いに伴って、NP-にも違いがある。他動詞用法では主語であるのに対して、自動詞用法では to Hanako に対応する後置詞である。

注8　もらうも、行ってもらうのように V-てをとれるが、Kuroda (1965) でも指摘されたように受身形と並行して捉えられるべきであると考え、ここでは深く論究しない。

注9　生成文法の枠組みから、この〜ているに伴う完了の意味の発生について研究したものに竹沢 (1991) がある。

注10　みるについては、現代語においては、単独用法は無いように思われる。

注11　(11)に関して、実際に V-てと PP との共起関係を調べる上でいくつか注意すべき点がある。まず初めに久保 (1992) でも指摘したように、V_1-て V_2の連なり自体は曖昧性を含んでいるということである。料理してあるといったときに、料理してどこかに存在しているという意味と料理済みであるという二種類の解釈がある。この二種類の解釈の間には、V_2の前にポーズが入りうるか否か、また、目的語、修飾語等が入りうるか否かといった違いがあり、前者では、V-ては付加詞であると考えられる。いま問題にしているのは、V_1-て V_2が強く連なっている場合（つまり V_2が逐語的意味を失っている場合）であるということに注意しなければならない。

次に、(i)の例のように一見場所を表す NP-にが現れているように思える文がある。

(i)　その絵は壁に掛けてある。

しかし、ここで壁には V_1 (掛ける) に伴われているものであり、反例とはならない。このように、判定に無関係な要素を排除するという意味で V_1の選択には注意する必要がある。

最後に、(ii)の文のように NP-にが修飾語として現れている場合がある。

(ii)　その肉は　花子のために　料理してある。

このような例も本文中での論点とは無関係である。

注12　Head Movement Constraint (Travis 1984, 131)

An X may only move into the Y which properly governs it.

本論文に関しては properly govern を単に govern と考えて差し支えない。

参考文献

Baker, M.(1988) Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.

Chomsky, N.(1981) Lectures on Government and Binding, Foris, Dordrect, Netherlands.

Emonds, J.(1985) A Unified Theory of Syntactic Categories, Foris, Dordrect, Netherlands.

大槻文彦(1897) 広日本文典、大槻家蔵版

金田一春彦(1950) 「国語動詞の一分類」、言語研究 15

Kubo, M.(1992) Japanese Syntactic Structures and their Constructional Meanings, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Kubo, M.(1993) "Domains and Principles of Japanese Word Accent", Language and Culture 24, Hokkaido University, Sapporo, 131-179.

久野暲(1973) 日本文法研究、大修館書店

Kuroda, S.-Y.(1965) Generative Studies in the Japanese Language, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

McCawley, J. and K. Momoi(1986) "The Constituent Structure of -te Complements", Papers in Japanese Linguistics 11, 1-60.

柴谷方良(1978) 日本語の分析、大修館書店

Shibatani, M.(1986) "On the Transitivity of the Stative Predicate Constructions", in S.-Y.

Kuroda ed., Working Papers from the First SDF Workshop in Japanese Syntax, San Diego, California.

Takezawa, K.(1987) A Configurational Approach to Case Marking in Japanese, Doctoral dissertation, University of Washington, Seattle, Washington.

竹沢幸一(1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」、仁田義雄編 日本語のヴォイスと他動性、くろしお出版

Travis, L.(1984) Parameters and Effects of Word Order Variation, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Williams, E.(1981) "On the Notion 'Lexically Related' and 'Head of Word'", Linguistic Inquiry 12, 245-274.

吉田茂晃(1993)「「存続の助動詞」考—万葉集の「り」について—」、万葉147

——北海道大学助教授——